みんなの顔が見えるまち

人権シリーズ vol.17

第1回 隣保館まつり開催！

8月25日㈯に第1回隣保館まつりが教室生を中心に約２００名が参加して開催されました。

場内では教室生の作品展示や、「人権入門」のビデオ上映がありました。ビデオは、日常生活にある身近な人権について、10の項目ごとに非常に分かりやすく解説を交えた内容で、参加者からは、画面を見てうなずきながら、「ある、ある」、「気を付けなあ」といった感想が漏れ、皆、熱心に見入っていました。

また、教室生が日頃の練習の成果として演奏やダンスなどの発表を行いました。

屋外ではフリーマーケット、カレーやちらし寿司、秀渓園の方によるカキ氷の販売なども行われ、多くの人々で賑わいを見せていました。

来年も、引き続き開催する予定です。多くの方の参加をお待ちしています。

▲リコーダー演奏発表

▲出店も多くの人だかりができました

▲教室生の作品展示

問い合わせ　国東市隣保館
☎0978(68)1722

部落解放に向けて立ち上がった人々
「同胞精神」のことばにふれて

9月初め、別府地区（国東・姫島・別府・日出）の人権教育に携わる関係者約20名が、フィールドワーク（現地研修）で豊後大野市と延岡市を訪ねた。

豊後大野市では、専任のガイドに先導され現地を10数カ所廻った。数々の今に伝わる遺構・文献など、限られた時間の中で専門的な事象や用語を丁寧に解説していただいた。合併後、大野支局には、市内外の関係者から「フィールドワークを取り入れた人権教育の推進」を狙いにした実地研修会として、問い合わせや参加者が多い、ということだった。

現地研修の初っぱなは、ナント荘厳な寺院。「なぜ最初がお寺なの…？」素朴な疑問を抱き続けていたが、見学地を数えるにつけ、その疑問点は自分なりに解き明かされたような気がした。その寺院は、浄土真宗明尊（みょうそん）寺。約６００年前建立の古刹（こさつ）。

本堂に設置された一張りの大きな太鼓に、まずは圧倒された。10年前、皮の張替がなされた折に、その太鼓の内側に書き残された文字が判読された。それは被差別部落の方々の芳名であったそうだ。

この太鼓ひとつを取り上げてみても、明尊寺の檀家の人々の職業が推測される。その職業に対するいわれなき差別に数百年の間、筆舌に尽くしがたい辛苦に耐えた人々の苦悩の姿に思いを寄せた参加者は、私ひとりではなかったのではないか。

岡藩政治の下、例えば、墓石の高さや法名（戒名）の制限、禁止をはじめ、日常生活多岐にわたる差別の中に、一明の光、それは、「同胞の精神」という崇高なる精神で被差別部落の人々に相対した明尊寺の永代の住職。「人は生まれながらにしてみな平等、同胞だ」という精神で、被差別部落の人々に注いだ「人の心」に触れ、猛暑でほてった私たちの心身に、砂漠の水滴のごとくしみ込むのを体感した。

（国見教育事務所生涯学習課）

▲明尊寺の太鼓

▲差別に抵抗し、制限を超えた墓石を立てた